

旗とは何か

監督 横尾朗大

本校の応援旗について

応援委員会発足の翌年の平成 25 年に、現在使用している「応援旗」を作製しました。デザインは「スクールカラーのコバルトブルー¹」を基調とし、そこに「本郷」と一目で分かる目印、通称「Hマーク」を、北原校長（当時）の許可を得て使用しました。なお、畳 7 枚分もの大きなサイズであつらえることで、応援される選手から見たときに、応援してくれる仲間が遠くにいても存在を確認できるという視覚的効果を踏まえています。

名称が「団旗」ではない理由は、そもそも「団旗」とは「団」の「旗」を指すものであり、すでに応援委員会では体育祭応援団のための団旗を三色 3 本管理していたためです。この時作製した旗は委員会の旗であるため、厳密には「会旗」ということとなりますが、普段は「応援を目的とする旗」という意味を込めて「応援旗」と呼んでいます。



応援旗（会旗）



体育祭応援団の団旗

旗の効用

旗はその集団の目印であり、組織の存在を示すものとして様々な場面で使用されます。組織の象徴的な存在として取り扱われることも少なくありません。

古くは源氏の白旗・平氏の赤旗のように、自身が所属する軍勢の目印および敵味方の識別を目的としていたものが、ひいては戦場における武士たちの帰属意識を育み、士気を鼓舞する効果をもたらしたとされています。



源平合戦絵巻

¹ 本郷学園 60 年史編纂委員会編『本郷学園 60 年史』（昭和 57 年）151 頁による。なお、平成 30 年に本校のスクールカラーは DIC-579C と定められた。

同じように、天皇から下賜された旧陸軍軍旗も戦時下の精神的支柱として用いられ、丁重な取り扱いが要求されました。天皇の分身であり、管理上は「兵器」として扱われたこの軍旗を敵軍に奪われることは最大の恥辱とされていたため、旗手は品行方正・成績優秀・眉目秀麗・長身であり、更に暗黙の要件として童貞で女遊びをしない高潔な人物が選ばれ、命を賭して守ったのです。

詳しくは後述しますが、今日、学校行事や式典などで掲揚される校旗もこの延長線上のものであります。そして応援団の団旗は、厳密には軍旗を模倣した校旗に倣って作製されたものと考えられます。



大日本帝国陸軍御国旗（軍旗）

校旗とは何か

学校ごとに必ず存在すると思われがちな校旗ですが、実をいえば、学校の備品として設置しなければならないものではありません。必需品ではないのです。現に、金沢大学では平成 13

年まで校旗に関する規程がありませんでした²し、津田塾大学は現在でも校旗のみならず、校章・校訓・校歌も規定されていません。

校旗とは、明治時代の学校令公布を受けて設立されていく各校それぞれのニーズに起因しています。たとえば皇室の慶事や日露戦争の勝利を祝う際であったり、天皇親閲式³での生徒・学生による分隊行進の際であったりと、主に忠臣愛國と軍国主義の思想によるものでした。明治 22 年に制定された旧制第一高等学校の校旗にあたる護国旗に対して、久原躬弦校長は「(学生)

諸子は皇室国家の大恩を忘れざると共に忠君愛國の標旗たる此旗⁴に対して十分赤誠⁴の意を表すべきなり」という内容の演説をしています。明治 24 年には、



久原躬弦



内村鑑三



旧制一高の校旗護国旗

² 金沢大学総務部企画広報室編『月刊アカンサスニュース 金沢大学広報誌』第 53 号（平成 13 年）1 頁による。

³ 日中戦時下の昭和 14 年 5 月 22 日、宮城（皇居）前広場にて行われた「陸軍現役将校配属令施行十五年記念親閲式」のこと。小森良夫『市民はいかにして戦争に動員されるか—戦争史の底辺を歩んで』（新日本出版社・2008 年）74～76 頁によれば、〈戦争遂行のために全国の学生・生徒を思想動員していく……（中略）……この親閲式において、天皇からじかに「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」が文部大臣に下賜される〉とある。

⁴ 少しもうそや偽りのない誠の心。まごころ。

嘱託教員であった内村鑑三⁵がこの校旗の前で最敬礼をしなかったために辞職に追い込まれるという、いわゆる内村鑑三不敬事件が起きています。⁶

今日の校旗は塩瀬⁷の生地に房飾りという軍旗の様式を模倣したものばかりですが、前述の通りその形状や取り扱いに関する法的な取り決めは存在しません。それにも関わらず、校旗や、校旗に倣って作られた団旗を、かつての軍旗のように過剰に神聖なものに見なして崇めたような行為はもはや時代錯誤であり、そのような応援団が理解されることは難しいでしょう。

団旗とは何か

一般に応援団の所有する団旗は、校旗に準ずる代理旗として扱われています⁸。応援への効用を考えたとき、本来であれば校旗そのものを使用すべきなのかもしれませんが、雨風にさらされる屋外での使用は生地を傷めてしまうため、その代理の旗という解釈で団旗を使用するケースが多く見られます。

それ以外に、学校への貢献度が高いと認められる応援団に対して、その活動内容を評価し、学校側が校旗を委託するという形式を採用する場合があります。たとえば、「早大は〃旗、を応援旗とも団旗とも呼ばないで〃旗、と呼んでいる。それは〃旗、を学校から貸与されたという形式をとっているからである⁹」・「東京六大学野球で神宮球場にひ



早稲田大学応援部の〃校旗、



慶應義塾大学応援指導部の塾旗

⁵ 万延2 (1861) 年－昭和5 (1930) 年。キリスト教思想家・無教会主義の創始者。江戸生まれ。札幌農学校在学中に洗礼を受け、卒業後渡米しアマースト大学などに学ぶ。雑誌『聖書之研究』を創刊。足尾銅山鉍毒反対運動に関わり、日露戦争に際しては非戦論を唱えた。

⁶ 水崎雄文『校旗の誕生』(青弓社・2004年) 31～34頁による。

⁷ 塩瀬羽二重のことで、生糸を使用した厚地の絹織物の一種。高級織物の素材として、校旗や優勝旗などによく使われている。

⁸ 『学生応援団教範』(高崎経済大学直属応援団・平成23年) 44頁によれば、〈応援団では大学の応援という意味から学章を描いた旗が一般的です。大学によっては学長から団旗を授与される形式を採用するところもあります。このように、団旗は校旗の代理旗という意味を持つ面もあり、大切に扱う必要があります〉(表記上一部改変)とある。

⁹ 東京六大学応援団連盟OB会編『応援団・六旗の下に』(シュバル・昭和59年) 4頁による。

るがえる塾旗は、義塾から應援指導部に貸与されているものだ¹⁰」とあるように、早慶の場合は、団旗を校旗そのものと見なして使用しています。それだけ学校からの信頼の厚い組織である、ということになるわけです。

なお、団旗を大きくする理由は、冒頭で述べたように選手や仲間からの視認性を高めるためです。たとえば運動部の試合会場で見られるよう



な、母校の名前が入った横断幕をよく見える位置に掲げ、選手を鼓舞することと同じ目的です。もともとは団旗も校旗と同じくらいのサイズだったようですが、昭和 20~30 年代にかけて各大学応援団が自らの存在感を誇示しようと競って大きくあつらえた¹¹ため、団旗といえば大きい旗、というイメージが定着したといわれています。

団旗の細かな取り扱い方法については各応援団によってまちまちですが、今日の教育現場の置かれている状況も果たすべき目的も、戦前とは全く異なっているという当たり前の大前提から鑑^{かんが}みても、「命に代えても団旗を守れ」などといった非常識な理屈によって、扱いがラジカルにならないように注意する必要があります。

しかしながら、学校名が入った大団旗がひるがえることで生徒たちは学校の一員であることを実感でき、母校に誇りを感じられるように、団旗には母校愛を喚起し得る求心力が備わっていることもまた事実です。重要な物品として内外に示すものである以上、粗末に扱うことはせず、常識の範囲内で可能な限りの注意と敬意とを払いながら、大切に管理することが重要です。もちろん、団旗を扱う所作の一つ一つにはきちんと意味があり、それを理解した上で行うことが大切です。

¹⁰ 渡部淳編『塾』第 255 号（慶應義塾・2007 年）29 頁による。

¹¹ 服部喜久雄編『一高三高野球戦史』（昭和 29 年）の口絵を見ると、昭和 7 年の時点ですでに大きな旗を掲げている三高応援団の様子が確認できる（右上図参照）。また、慶應義塾大学應援指導部が管理する「幻の大塾旗」を昭和 21 年に作製した際、単位を間違えて発注したために旗手 1 名では支えきれないようなサイズのものが出来上がってしまい、そのことが団旗を大きく作製する端緒となった、という説もある。いずれにしても、この時期に各大学で団旗の巨大化が盛んに行われた。

本校の校旗

新元号への改元を目前にした平成31年4月、これまでの本会の活動が学校より評価されて、発足以来の宿願であった校旗を寄贈していただけることになりました。平成29年に受賞した同窓会からの表彰も含め、これによって本会は本当の意味で「学校からの信頼を得た組織である」と言えるところまでたどり着く



ことができました。今後は学校の象徴である校旗を管理するに足る組織かどうか、常に問われることとなります。「模範的な活動を通して本学の発展に尽力」し続けてきたことへの自負と誇り、そして感謝の気持ちを忘れずに、学校生活の向上を実現するための活動に邁進いたします。

さて、本校の歴史を遡ると、本郷学園校旗（以下、「学園旗」とする）は昭和25年に作製されています。これは、戦前に本校創立者である松平頼壽先生が昭和天皇より下賜された大切な絹織物を布地にした、という逸話の伝わる非常に貴重な校旗ですが、現在は損傷が激しいため、あまり表舞台に飾られることはありません。デザインにはスクールカラーである「新生本郷を象徴するコバルトブルー¹²」と「戦前においても、機会あるごとに使われていた高貴ゆかしい紫¹³」（江戸紫・DIC-257）とが用いられ、表裏それぞれに中学または高校の校章が一つ描かれている、リバーシブルタイプの珍しい校旗です。青と紫とのツートンカラーの由来は、下賜された布地の足りない部分を、当時の図工科教諭であった服部季彦先生の提案によって同系色の布を継ぎ足したためといわれています。¹⁴



学園旗

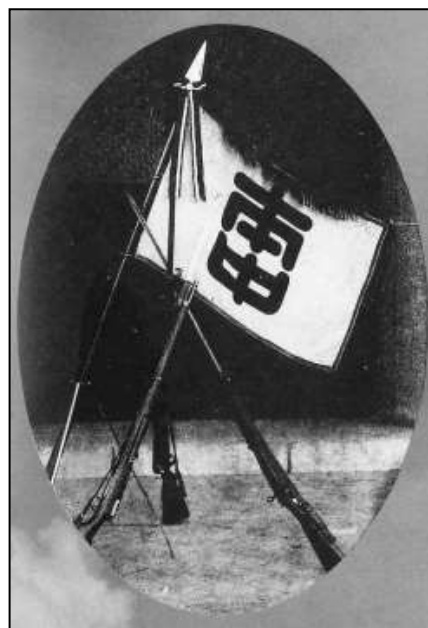
¹² 前掲『本郷学園60年史』62頁による。

¹³ 同上。ここから旧校旗（次頁画像参照）は紫色だったと推定されるが、定かではない。

¹⁴ 本郷学園校史編纂委員会編『本郷のあゆみ 1921-2006』（平成18年）58頁による。

本校が所有する校旗はほかにもいくつかあります¹⁵が、いずれも学園旗の配色を踏襲しておらず、本郷のスクールカラーは採用されておりません。今回管理を任されることになった新しい校旗は応援活動を前提としているため、布地や飾りは風にはためきやすいもの、大きさ¹⁶や文字・校章の配置は視覚的効果を念頭に置いたものを選んでいくという点で、学園旗とは様式の違いが見られます。しかしながら、学園旗の布地の正確な色情報やその比率に加え、布の継ぎ目に至るまで、デザインを忠実に再現し、復刻した、いわば学園旗の分身です。従って、応援旗とは違い、学校全体に関わる大きな行事など特別な場合にのみ限定して掲揚します。

本郷百周年を2年後に迎え、新世紀への輝かしい門出を体現できるように、まずは常識の範囲内できちんと敬意を払い、大切に管理することで、本校の発展に尽力してまいります。



戦火によって焼失した
最初の校旗（旧校旗）



※本稿では、応援を目的とした学校公認のクラブを「応援団」とし、その「応援団」が扱う旗を「(応援) 団旗」として、一括して表現しました。

¹⁵ 中学校旗および高等学校旗の2枚（右上図参照）。ほかに略旗が複数枚存在する。
¹⁶ タテ 289cm×ヨコ 365cm。これは吉数の奇数であることに加え、初代から第三代までの卒業生計 17 名にちなみ、それを掛け合わせた二乗数と、365=1 年間を通して充実した活動ができるよう願いを込めたことに由来している。なお、応援旗も同じ寸法であり、そのタテ数は発足時の指導部員数に由来する。